

CEMSAR

エネルギー管理士がISO50001審査員資格を取得 横河電機エネルギーコンサルティング部・菅野不二夫さんの場合

CEMSARが評価・登録するエネルギーマネジメントシステム（EnMS）審査員には、前号本欄でご紹介した稲葉允さんのように、マネジメントシステムの第三者認証機関に所属されている方のほか、企業で省エネ実務に従事されている技術者の方も数多くいらっしゃいます。エネルギー管理士として生産現場における省エネを推進する

立場である横河電機エネルギーコンサルティング部の菅野不二夫さんもそのひとりです。

今回は、菅野さんがEnMS審査員資格を取得された経緯と今後の抱負について寄稿していただきました。



ISO50001との出会い

エネルギー管理は供給側が一括して行うことが多く、需要側（製造部）は生産最優先で、エネルギー収支を意識することなく、管理も行っていないことが多いのが実情です。長年取り組んでいる省エネ活動も供給側の設備効率化などの取り組みが主流となっていて、需要側の取り組みに進展しない事例が多く見受けられます。しかし、継続的な省エネ活動には供給側から需要側まで全体を見渡した活動が不可欠になり、工場全体のエネルギーの流れを「見える化」することが大きな課題となっています。

工場全体の省エネに転換するためには、エネルギーの「見える化」による定量的情報に基づいた事実と、そこから論理的に導かれる対策が必要となります。そのためには、従来の「カイゼン」で培われた品質、コスト、納期遵守に最適エネルギー使用の視点を加えた活動（QCD+E）が求められます。これを論理的に支える仕組みとして、ISO50001制定の意図である「エネルギーの効率的利用、運用管理により、エネルギーコストダウンによる競争力の強化とその結果としての温室効果ガス排出量の低減」の実現に向けた「エネルギーマネジメントモデル」がフィットすると思ひ、規格動向に注目していました。

エネルギー管理士は、省エネのテクニカルな面での提案・支援が主体でしたが、組織的取り組みを継続していく体制の必要性を理解してもらうために、ISO50001を活用できればと思ひ、審査員資格取得にチャレンジしました。

EnMS審査員としての視点

研修コースでは、審査員としては、要求事項に合致しているのか、どこが満たしていないのかなどを文書、データに基づいて判断することが求められているのに、特に数字が出てくると、これで何か改善のネタが見つけれられるのかといったコンサル的視点でとらえてしまい、審査の趣旨からずれてしまうことがありました。

模擬審査では、ストーリーを明確にできていない点もあって、必要なことを聞き出せないこともありました。省エネ法の関連やデータの見方は日常活動そのものなので問題はありませんが、規格の要求事項との関連、位置づけといった審査員視点での見方になるための頭の切り替えが難しいと感じました。大局的観点から必要な情報を導きだし、事実を判断し、大きな流れを常に意識して進めていくことの重要性を認識することができました。

監視・測定・分析を手がける

省エネ活動のPDCAの基本となるのは、測定したデータの分析により要因を特定し、エネルギーレビューで決定される改善の機会、優先度です。このための監視・測定・分析作業をお客様と一っしょに行い、提案活動のベースとなるものです。これらのデータを基礎に、組織の継続的改善を進めていくためにEnMSを活用していきます。まずは、データの監視・測定・分析からスタートするのです。



横河電機(株) ソリューションサービス営業統括本部 VPS開拓本部 エネルギーコンサルティング部 菅野不二夫さん

▶問合せ：セムサール事務局 TEL：(03) 5543-3062 URL：http://www.eccj.or.jp/cemsar E-mail：cemsar@eccj.or.jp